

本学学生の国際交流に関する意識調査

加藤法子* 鳥越郁代* 吉村美奈子** Ian Stuart Gale***
芋川 浩* 許 棟翰*** 岡本雅享*** 松浦賢長*

A study on student awareness regarding international exchange programs open to Fukuoka Prefectural University students

Noriko Kato Ikuyo TORIGOE Minako YOSHIMURA Stuart GALE Yutaka IMOKAWA
Hur DONHAN Masataka OKAMOTO Kentyo MATSUURA

Abstract

The objective of this research was to assess the awareness of Fukuoka Prefectural University students relative to the international exchange programs open to them. We conducted a survey in order to determine their degree of awareness and found that they scored relatively highly in relation to both overseas training and overseas study. These results were however tempered by the fact that the same students' awareness of the support systems available to them was relatively low. In terms of their motivation, the students were found to be positively inclined towards greater opportunities for intercultural understanding and exchange. The survey also pointed towards greater diversity in the type of international exchange program envisaged and desired by the students. In conclusion, the data suggested that further expansion of the overseas training and exchange programs available to Fukuoka Prefectural University students is appropriate. The data also suggested that the revitalization of the international exchange programs currently on offer, and the development of a more highly internationalized learning environment, would also be consistent with the self-perceived needs of the students and their transformation into global citizens.

Key Word: international exchange, awareness survey

要 旨

本学の国際交流プログラムを検討するための基礎資料を得るために、本学学生の国際交流に関する意識調査を実施した。海外研修や海外留学の認知度は高かったが、それらの支援制度についての認知度は低かった。また、本学学生は、国際交流によって、異文化理解や異文化交流を望んでおり、また、英語圏での交流や、専門分野での交流など、そのニーズは多様化していることが分かった。今後は、海外研修や海外留学の拡充に加え、学内で実施している国際交流プログラムの活性化も図り、継続的学習環境の整備を行う必要がある。

キーワード：国際交流、意識調査

* 福岡県立大学看護学部
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

** 前福岡県立大学看護学部
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

*** 福岡県立大学人間社会学部
Faculty of Integrated Human Studies and Social Science, Fukuoka
Prefectural University

連絡先：田川市伊田4395番地
加藤法子
kato@fukoka-pu.ac.jp

緒言

世界的なグローバル化の進展を背景に、わが国でも高等教育の国際化に向けた取り組みが推奨されている。平成25年に文部科学省が発表した大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等¹⁾では、グローバル化に対応した教育環境づくりを進めるために、大学は教育内容と教育環境の国際化を徹底的に進め世界で活躍できるグローバルリーダーを育成すること、グローバルな視点を持って地域社会の活性化を担う人材を育成することなど、大学の特色・方針や教育研究分野、学生の多様性を踏まえた効果的な取り組みを進めることが必要であるとしている。このような背景の中、福岡県立大学でも、大学の特徴を踏まえ、国際交流センターを中心に、専門職業人に必要とされる「多様な文化・人々に対する理解」や「コミュニケーション力」などを身に付け、グローバル社会で活躍する人材育成を目指し、複数の国際交流プログラムを実施している。イギリスの海外語学研修や、中国・韓国の交流協定校との交換留学制度、平成26年度からは、学生の国際理解の学習意欲を高めるためのプログラムとして韓国短期研修などの新たな取り組みも開始された。さらに、学内では、留学生との交流やスキルアップゼミなど自主的な学習や交流を支援するプログラムや国際交流チューター制度の導入なども行われている。また、平成27年には韓国の威徳大学校、平成28年には中国の珠海学院大学と国際交流協定を締結し、学生の留学先の選択肢の幅も大きく広がってきている。しかし、これらプログラムへの参加状況を見ると、イギリス短語学研修や韓国短期研修の参加者はある程度の人数を確保できているものの、1年間の語学留学の希望者は減少傾向にあり、平成25年の8名を境に、年々減少し、平成28年には3名の参加にとどまっている。また、学内で実施している留学生との交流プログラムについても、多くの学生が参加している状況とは言い難い。

平成27年に本学学生への国際交流に関する簡易調査を実施したところ、学生は異文化理解や異文化交流がしたいと考えている人が多くいることが分かった。しかし、国際交流プログラムの参加につながり難いことを考えると、学生の国際交流に関するニーズを詳細に把握し、それらを踏まえた国際交流プログラムの検討と環境づくりをすることが必要であると考え。そこで、本研究では、国際交流プログラ

ムの検討をするための基礎資料を得るために、本学学生の国際交流に関する意識調査を実施する。さらに、その内容を踏まえ、現在実施している国際交流プログラムを考察することを目的とする。

方法

1. 調査対象

対象は、本学の人間社会学部及び看護学部の学生で、卒業を控えた4年生を除く1年生から3年生とした。対象者の受講者の多い科目において調査票を配布し（配布数705）、回収が得られた人を対象とした。

2. 調査方法

調査期間は平成28年2月～3月であった。対象者に調査の内容が書かれた調査票を配布し、依頼を行った。調査票の回収は、回収箱を設置し、調査票の提出をもって、同意を得たこととした。

3. 調査内容

対象者の属性（年齢、性別、学科）、海外渡航に関する項目（渡航経験の有無、渡航の希望）、海外研修・海外留学に関する項目（認知度、参加経験の有無、参加希望の有無）、海外研修・海外留学への参加するための条件に関する項目（参加するための条件、希望するプログラム）、海外研修・海外留学の支援制度に関する項目（4年次卒業ルートについての認知度と活用の希望について、奨学金制度の認知度、保護者説明会の希望の有無）、留学生との交流に関する項目（交流経験の有無、交流希望の有無）、国際交流に関する要望等の全20項目である。調査票は、前年度に実施した国際交流に関する意識調査の結果を基に、学生のニーズがより明確になるように、また、本学の国際交流プログラムの状況を踏まえた質問内容になるように質問項目と回答内容を見直し項目を抽出した。その後、国際交流推進委員会のメンバーで調査票の内容についての検討を行った。

4. 倫理的配慮

対象者には、調査票の趣旨と方法、自由意志での参加であること、回答しないことで不利益を生じることではない事、研究目的以外に使用しないことなどを、紙面を用いて説明し、調査票の提出をもって同意を得たものとした。尚、調査票は無記名とし、所定の位置に設置した回収箱で回収を行った。尚、調査を実施するにあたり、福岡県立大学研究倫理委員会の審査を得て実施した。

5. 分析方法

調査した各項目については、単純集計を行った。また、記述回答については、内容をコード化し、カテゴリーに分類した。

6. 用語の定義

海外研修：本学で、現在実施している短期の研修（イギリス短期語学研修、韓国短期研修）とする。

海外留学：本学と交流協定を締結している大学への1年間の留学とする。留学先は、中国（南京師範大学、吉林大学珠海学園）と韓国（大邱韓医大、三育大、威徳大）の5校である。

結果

1. 回収率及び対象者の基本属性

調査票を705名へ配布し、671名（回収率95.2%）から回収した。有効回答数は671名（有効回答率100%）であった。尚、対象者の属性については、表1に示す。

表1 対象者の基本属性

項目		人数 (%)
性別	男性	105 (15.6)
	女性	561 (83.6)
	無回答	5 (0.7)
学部	人間社会学部公共社会学科	130 (19.4)
	人間社会学科社会福祉学科	162 (24.1)
	人間社会学部人間形成学科	118 (17.6)
	看護学部看護学科	255 (38.0)
	無回答	6 (0.9)
学年	1年生	240 (35.8)
	2年生	219 (32.6)
	3年生	200 (29.8)
	その他・無回答	12 (1.8)

(n=671)

2. 海外の渡航経験について

本学学生の海外の渡航経験の有無について質問したところ、渡航経験があると答えた人は240名（35.8%）で、426名（63.5%）が渡航経験なしであった（表2-1）。渡航経験がある人の渡航の形態としては、旅行が最も多く138名（58%）、修学旅行を含む本学以外の留学や海外研修での参加が85名（35.4%）、本学の留学や海外研修での参加が46名（19.2%）であった（表2-2）。渡航先としては、韓

国が最も多く、95名、次いでアメリカ（グアム、ハワイを含む）43名、中国・台湾42名、イギリス38名、シンガポール37名、オーストラリア37名であった（表2-3）。地域別にみると、アジア圏が多く、全体の62.2%を占めていた。

表2-1 海外の渡航経験の有無

項目	人数 (%)
渡航経験あり	240 (35.8)
渡航経験なし	426 (63.5)
無回答	5 (0.7)

(n=671)

表2-2 海外へ渡航経験ありと回答した人の渡航の内訳（複数回答）

項目	人数 (%)
海外に居住していた	3 (1.3)
本学の留学や研修への参加	46 (19.2)
本学以外の留学や研修への参加 (修学旅行含む)	85 (35.4)
旅行	138 (58.0)
ボランティア活動	4 (1.7)
その他	16 (6.7)

* (%)は240名のうちの割合を示す (n=240)

表2-3 海外へ渡航経験ありと回答した人の渡航先の内訳（複数回答）

渡航先	人数	渡航先	人数
韓国	95	フィリピン	5
アメリカ	43	カンボジア	5
中国・台湾	42	ミャンマー	2
イギリス	38	アイルランド	2
シンガポール	37	ノルウェー	1
オーストラリア	37	デンマーク	1
マレーシア	21	スイス	1
タイ	12	ドイツ	1
カナダ	11	イタリア	1
ベトナム	8	インドネシア	1
フランス	7	インド	1
ニュージーランド	6	ケニア	1

(n=240)

大学を卒業するまでに海外に行きたいかという問いに対しては464名（69.2%）が行きたい、199名

(29.7%) が行きたくないであった (表3-1)。海外に行きたい人の渡航の形態としては、旅行が最も多く447名 (96.3%)、次いで本学で行われている研修や留学の参加が92名 (19.8%) であった (表3-2)。

表3-1 卒業するまでに海外に行きたいか

項目	人数 (%)
行きたい	464 (69.2)
行きたくない	199 (29.7)
無回答	8 (1.2)

(n=671)

表3-2 海外に行きたいと回答した人の渡航目的の内訳 (複数回答)

項目	人数 (%)
旅行	447 (96.3)
本学で行われている海外研修や留学への参加	92 (19.8)
本学以外の海外研修や留学への参加	40 (8.6)
ボランティア活動	67 (14.4)
その他	4 (0.8)

* (%) は464名のうちの割合を示す (n=464)

3. 本学の海外研修プログラム (イギリス短期語学研修、韓国短期研修) に関する項目

本学の海外研修の認知度については、イギリス短期語学研修を知っている学生が586名 (87.3%)、韓国短期研修が546名 (81.4%) であった (表4)。

表4 現在実施している本学の海外研修・海外留学を知っているか

項目	知っている	知らない	無回答	
海外研修	イギリス短期語学研修	586 (87.3)	72 (10.7)	13 (1.9)
	韓国短期研修	546 (81.4)	112 (16.7)	13 (1.9)
海外留学	480 (71.5)	174 (25.9)	17 (2.5)	

数値は人数、() は割合を示す (n=671)

本学の海外研修に参加したいと思うかという問いに対しては、海外研修に参加したい人は203名 (30.3%) であった (表5-1)。参加したい海外研修は、イギリス短期語学研修が106名、韓国短期研修が117名であった。

表5-1 本学の海外研修に参加したいか

項目	人数 (%)
参加したい	203 (30.3)
参加したくない	453 (67.5)
無回答	15 (2.2)

(n=671)

海外研修に参加したいと答えた人の理由としては、異文化交流がしたいが最も多く148名 (72.9%) 次いで英語の語学力を高めたい128名 (63.1%)、異文化理解がしたい101名 (49.8%) であった (表5-2)。

海外研修に参加したくない人は、453名 (67.5%) で、その理由としては、経済的問題が最も多く293名 (64.7%)、次いで語学力がない205名 (45.3%)、海外へ行くことへの不安130名 (28.7%) であった (表5-3)。

表5-2 本学の海外研修に参加したいと回答した人の理由 (複数回答)

項目	人数 (%)
英語の語学力を高めたい	128 (63.1)
韓国語の語学力を高めたい	62 (30.5)
異文化交流がしたい	148 (72.9)
異文化理解がしたい	107 (52.7)
見聞を広めたい	101 (49.8)
専門分野や今後の就職に役立てたい	27 (13.1)
外国の人と知り合い (友達) になりたい	88 (43.3)
その他	6 (3.0)

* (%) は203名のうちの割合を示す (n=203)

表5-3 本学の海外研修に参加したくないと回答した人の理由 (複数回答)

項目	人数 (%)
海外に興味がない	82 (18.1)
語学力がない	205 (45.3)
経済的問題	293 (64.7)
プログラムに魅力を感じない	46 (10.2)
実施時期の問題	84 (18.5)
学業上の不安	122 (26.9)
海外へ行くことへの不安	130 (28.7)
親からの反対	24 (5.4)
その他	27 (6.0)

* (%) は453名のうちの割合を示す (n=453)

4. 本学の海外留学に関する項目

本学の海外留学についての認知度については480名(71.5%)が知っていると答えていた(表4)。本学の海外留学に参加したいかという問いには、参加したいと答えた人は64名(9.5%)であった(表6-1)。その理由として、参加したいと答えた人の51名(78.5%)が異文化交流をしたいと答えており、次いで、異文化理解をしたいが40名(62.5%)、韓国語の語学力を高めたいが36名(56.3%)であった(表6-2)。参加したくないと答えた591名(88.1%)の理由としては、経済的問題が最も多く、332名(56%)、次いで語学力の問題242名(40.8%)、学業上の不安が236名(39.8%)であった(表6-3)。

表6-1 本学の海外留学に参加したいか

項目	人数 (%)
参加したい	64 (9.5)
参加したくない	591 (88.1)
無回答	16 (2.4)

(n=671)

表6-2 本学の海外留学に参加したいと回答した人の理由 (複数回答)

項目	人数 (%)
中国語の語学力を高めたい	14 (21.5)
韓国語の語学力を高めたい	36 (55.4)
異文化交流がしたい	51 (78.5)
異文化理解がしたい	40 (61.5)
見聞を広めたい	31 (47.7)
専門分野や今後の就職に役立てたい	17 (26.2)
外国の人と知り合い(友達)になりたい	30 (46.2)
その他	0 (0)

* (%)は64名のうちの割合を示す (n=64)

表6-3 本学の海外留学に参加したくないと回答した人の理由 (複数回答)

項目	人数 (%)
海外に興味がない	104 (17.5)
語学力がない	242 (40.8)
経済的問題	332 (56.0)
プログラムに魅力を感じない	53 (8.9)
実施時期の問題	116 (19.6)
学業上の不安	236 (39.8)
海外へ行くことへの不安	150 (25.3)
親からの反対	48 (8.1)
在学期間延長の可能性	140 (23.6)
その他	33 (5.6)

* (%)は591名のうちの割合を示す (n=591)

5. 海外研修・海外留学参加の条件に関する項目

本学の海外研修に参加するとすればどのような条件が必要かという問いに対しては、経済的支援489名(72.9%)、研修に係る費用が安価であること483名(72.0%)、自分自身の語学力474名(70.6%)であった。海外留学については、自分自身の語学力が最も高く、507名(75.6%)、次いで経済的支援472名(70.3%)、研修に係る費用が安価であること444名(66.2%)であった(表7)。

表7 本学の海外研修・海外留学に参加するとすれば、どのような条件が必要か (複数回答)

項目	海外研修	海外留学
自分自身の語学力	474 (70.6)	507 (75.6)
研修に係る費用が安価であること	483 (72.0)	444 (66.2)
研修に行く時期	386 (57.5)	375 (55.9)
研修による単位互換	287 (42.8)	351 (52.3)
受け入れ先の対応の充実	251 (37.4)	318 (47.4)
研修プログラムの充実	178 (26.5)	198 (29.5)
渡航中の大学側のフォロー	295 (44.0)	331 (49.3)
渡航前後の大学側のフォロー	240 (35.8)	277 (41.3)
教職員の相談体制の充実	141 (21.0)	191 (29.5)
親の理解	254 (37.9)	258 (38.5)
経済的支援	489 (72.9)	472 (70.3)
研修に関する詳細な情報	154 (23.0)	159 (23.7)
現地の情報	213 (31.7)	231 (34.4)
その他	8 (1.2)	11 (1.6)

* (%)は671名のうちの割合を示す (n=671)

本学の海外研修に参加するとすれば、どのような研修を望むかという問いに対しては、観光が最も多く425名(63.3%)、語学力向上のための研修が385名(57.4%)、海外の生活体験380名(56.6%)、地元の人や学生との交流377名(56.2%)であった(表8)。

表8 本学の海外研修に参加するとすれば、どのような研修を望むか (複数回答)

項目	人数 (%)
語学力向上のための研修	385 (57.4)
地元の人や学生との交流	377 (56.2)
異文化理解のための研修	309 (46.1)
海外の伝統文化体験	246 (39.3)
海外の生活体験	380 (56.6)
ホームステイ	267 (39.8)
観光	425 (63.3)
専門分野に関する研修	107 (15.9)
同じ専門分野を学ぶ学生との意見交換会	85 (12.7)
その他	3 (0.4)

* (%)は671名のうちの割合を示す (n=671)

6. 本学の海外研修・海外留学の支援について

学部によって4年次卒業ルートがあることを知っているかという問いに対しては、知っている人は195名(29.1%)、知らない人は461名(68.7%)であった。条件があれば、4年次卒業ルートを活用したいかという問いには、活用したい270名(40.2%)活用したくない101名(15.1%)わからないが285名(42.5%)であった。交流協定書に基づく、海外留学及び海外研修参加者に対して、経済負担を軽減することを目的として、奨学金(月額2万円)が給付されることを知っているかという問いには、知っている人が166名(24.7%)であり、知らない人は489名(72.9%)であった。本学が実施している研修について保護者向けの説明会があったほうがよいかという問いには、270名(40.2%)があったほうがよいと回答していた。

7. 留学生との交流

本学に来ている留学生と交流した経験があるかという問いには、291名(43.4%)の学生が経験ありと答えていた(表9-1)。交流の場面としては、授業が最も多く145名(49.8%)、サークルが102名(35.1%)であり、国際交流プログラムで交流した経験がある人は25名(8.6%)であった(表9-2)。また、留学生

と交流したいかという問いには435名(64.8%)が交流したいと答えていた(表10-1)。交流したいと答えた人の理由としては、異文化理解がしたいが238名(54.7%)、異文化交流がしたいが216名(49.7%)、外国の人と知り合いになりたいが202名(46.4%)であった(表10-2)。

表9-1 本学の留学生と交流した経験があるか

項目	人数 (%)
あり	291 (43.4)
なし	363 (54.1)
無回答	17 (2.5)

(n=671)

表9-2 留学生との交流したことがあると回答した人の交流した場面 (複数回答)

項目	人数 (%)
授業	145 (49.8)
国際交流プログラム	25 (8.6)
サークル	102 (35.1)
バイト	13 (4.5)
ボランティア活動	9 (3.1)
その他	63 (21.6)

(%)は291名のうちの割合を示す (n=291)

表10-1 留学生と交流したいか

項目	人数 (%)
はい	435 (64.8)
いいえ	220 (32.8)
無回答	16 (2.4)

(n=671)

表10-2 留学生と交流したい回答した人の理由 (複数回答)

項目	人数 (%)
英語の語学力を高めたい	155 (35.6)
中国語の語学力を高めたい	43 (9.9)
韓国語の語学力を高めたい	122 (28.0)
異文化交流がしたい	216 (49.7)
異文化理解がしたい	238 (54.7)
見聞を広めたい	154 (35.4)
専門分野や今後の就職に役立てたい	52 (12.0)
外国の人と知り合い(友達)になりたい	202 (46.4)

(%)は435名のうちの割合を示す (n=435)

8. 本学の国際交流に関する要望についての自由記述 (表11)

本学の国際交流に関する要望について、自由記述での回答を求めた。各記述から、要望についての内容についてコードを抽出したところ73のコードが抽出された。同様の内容をカテゴリーとしてまとめたところ、4つのカテゴリーに分かれた。「単位互換」「経済的支援」「4年次卒業ルート対象の拡大」「本学外の研修への経済的支援」から、「海外研修・海外留学の支援・大学のシステムに関する要望」が抽出された。「英語圏への留学」「研修先・留学先の選択肢の拡大」「短期研修プログラムの増加」「専門分野を学ぶ研修」のコードから、「海外研修・留学の内容に関する要望」が抽出された。「親への説明会の開催」「研修・留学への参加者の報告会の開催」「説明会の回数の増加」「早期の説明会の開催」「情報の充実」から「海外研修・留学の情報発信に関する要望」が抽出された。「英語圏の留学生の受け入れ」「留学生との交流の場の拡大」「寮での交流の強制の中止」から「留学生との交流に関する要望」が抽出された。

考 察

今回、本学の国際交流プログラムを検討するための基礎資料を得るために、本学学生の国際交流に関

する意識調査を実施した。これらの結果を、本学学生の国際交流に関する認識の特徴、海外研修について、海外留学について、今後の国際交流に関する課題から考察する。

1. 本学学生の国際交流に関する認識の特徴

現在、本学で実施している海外への派遣プログラムとして、イギリス短期語学研修、韓国短期研修、交流協定校への交換留学の制度がある。これらの国際交流プログラムの認知度は、海外研修が8割を超えており、海外留学は7割を超えていた。これらの海外派遣に関する海外研修、海外留学については、現在、新年度のオリエンテーションや学生へのメール配信、留学説明会、学内での掲示等で情報提供を行っている。学生の認知度から考えると、これらの情報提供の実施等により、海外派遣の情報は十分に浸透しているといえる。しかし、学生の要望から、説明会の回数を増加してほしい、研修に関する掲示の充実、研修・留学参加者の報告会など、海外留学や海外研修に関わる情報の提供を希望していることから、認知度はあるものの、その研修の詳細な情報の提供は十分に伝わっているとはいえないかと考える。また、調査結果から、研修にかかわる経済的支援を望む声が多かったが、本学で実施している交流協定校への派遣の際の奨学金制度の認知

表11 本学の国際交流に関する要望

カテゴリー	コード	数
	単位互換	4
海外研修・海外留学の支援体制・大学のシステムに関する要望	経済的支援	8
	4年次ルート卒業対象の拡大	2
	本学外の研修への経済的支援	2
海外研修・海外留学の内容に関する要望	英語圏への留学	8
	留学先・研修先の選択肢の拡大	18
	短期研修プログラムの増加	7
	専門分野を学ぶ研修	5
研修・留学の情報発信に関する要望	親への説明会の開催	3
	研修・留学への参加者の報告会の開催	1
	説明会の回数の増加	2
	早期の説明会の開催	2
	情報の充実	3
受け入れ留学生との交流に関する要望	英語圏の留学生の受け入れ	2
	留学生との交流の場の拡大	5
	寮での交流の強制の中止	1

度は3割にも満たず、4年次卒業ルートについての認知度も3割程度であった。これらのことから、研修に関する本学の支援体制についての認知度は低いといえる。これらの支援体制は、学生が留学や研修への参加を決断する上で、重要な判断材料でもあると言えることから、研修プログラムの支援体制も含めた情報提供を積極的に行っていく必要があるといえる。

2. 海外留学について

海外留学したいと答えた人は全体の1割であった。小島らが418名の大学生に実施した海外留学に関する意識調査²⁾では、留学の意志がある学生が276名(66%)という結果であった。これらは、対象者の背景や大学の規模、提供しているプログラムの内容等が異なるため、単純に比較することはできないが、本学の学生のうち留学したいと答えた人が1割にも満たなかったのは、海外留学の意思としては、低いのではないかと考える。留学希望者が少ない要因の一つとして、留学先の選択肢が少ないことであると考えられる。実際に、本学学生の留学を希望しない理由として、経済的理由以外にも、自身の語学力や学業上の不安と答えた人の割合が高かった。現在、本学の海外留学先として選択できるのが、中国と韓国のみである。小・中学校から教育として取り入れられている英語と比較すると、韓国語や中国語は、大学の第二外国語としての選択により学び始めることが多いことから語学力を問題として捉え、留学希望者が少ないのではないかと考えられる。また、調査結果から、中国や韓国以外の国への留学や英語圏への留学を希望する声も多くあったことから、留学先の拡大も含めた検討を行っていく必要があるのではないかと考える。学業上の不安については、本学の学部の特徴などから、専門資格取得や教職課程のための単位取得が必要であり、講義や演習、実習等の履修計画の中に留学計画を入れる難しさがあるのではないかと考える。また、留学することにより、どのような力が付き、その後の学習や専門分野を学ぶ上でどのような付加価値がつくかイメージできないことも考えられる。渡部が行った調査によると、留学の目的としては、人間形成にかかわるものが高い位置づけにあり、かつその達成度は高い³⁾という報告がされている。また、留学の副次的効果として、「日本人としての自覚を高める」というものがある³⁾とも述べている。これらの事からも、海外留学での経験は、語

学力以外の力も獲得でき、これらは、その後のキャリア形成等にも役立つのではないかと考える。これらのことから、留学に伴う履修計画の見える化や実際に留学した学生の留学報告会などを実施することで、留学後のイメージ化が図れ、学業上の不安の軽減につながるのではないかと考えられる。また、本学の海外留学に参加した人が、留学によりどのような力を得たか、その後の学習やキャリア形成等にどのように影響を与えているかなど明らかにしていくことも必要ではないかと考える。

3. 海外研修について

海外研修に参加したいと答えた人は、3割程度であり、海外留学と比較して、希望者が多かった。海外研修は、イギリスで約3週間、韓国で5日程度であり、学業に影響しない夏季休暇、春期休暇中に実施していることから、比較的参加しやすい条件であると考えられる。これらの研修に参加したいと答えた人の理由として、異文化理解や異文化交流がしたい、英語の語学力を向上させたいと答えた人が多かった。異文化理解や異文化交流という点では、イギリス語学研修では、ホームステイの期間もあり、イギリスの生活体験や地元の人との交流や同世代の大学生チューターとの関わりを通して、異文化理解が深まっているのではないかと考えられる。また、韓国短期研修では、事前に訪問先の学生とメールで連絡を取り合い、現地でも対面し、その学生と共に観光や散策、食事などの時間を共有する。これらの関わりを通して、同世代の学生の状況や取り巻く環境を知り、異国の学生がどのような意識をもち、生活しているかを知ることができ、異文化理解が深まっていると考える。これらのことから、現在行っている海外研修は、異文化理解・異文化交流という視点では学生のニーズに合った内容となっているのではないかと考える。黄の調査によると、国際交流で実際に異文化の学生や人々と交流し、彼らと共に日常生活を営み、異文化を経験することによって異文化に対する意識の大きな変化が現れた。それは、異文化の経験内容がこれまで自己が有していた異文化についての理解とは異なるという変化である。(中略)それは、学生はこれまで自己が有していた理解の枠を超えて異文化という新たな視点で異文化を理解する契機を持つのである。(中略)このような蓄積はグローバル人材の育成につながるだろう⁴⁾と述べている。さらに、異文化交流によって相互の文化理解が深まる面が現

れるが、同時に異文化理解の限界も顕在する⁴⁾とも述べている。黄のいう異文化理解とは、異文化の視点において、自文化とは異なる文化的地平においてものを見る視点を持つことが必要であり、異文化を自文化に同化する事ではなく、むしろ自文化の視点を超えて、異文化の視点で自己の生を営んで初めて可能になる理解である⁴⁾と述べている。このことから考えると、本学で実施している海外研修のプログラムでは、異文化理解というよりも、他国の文化を自国の視点で理解するレベルにとどまるのではないかとと思われる。さらに黄は、短期間の海外での体験学習の効果は限界があり、文化の多様性と相違性において人間としての自己の在り方を絶えず吟味し問い続けることが大学教育に求められる⁴⁾とも述べている。これらのことから、グローバル化社会で活躍する人を育成するためには、学生が海外研修で培った他国の文化理解をより深め、自文化の視点を超えた視点から文化を考察することが求められ、学内での継続的学習環境の整備が必要ではないかと考える。

研修に参加したくない人の理由としては、経済的問題、語学力の問題が上がっていた。経済的問題については、海外研修プログラムの検討する際、プログラムの内容だけでなく、学生の安全を最優先に考える必要があるため、コストダウンにも限界がある。前述したが、交流協定校への研修には2万円の補助金が支給される。また、イギリス語学研修については、平成26年から4年間、福岡県の世界に打って出る若者育成事業に採択され、福岡県からの補助金を得ることができ、イギリスの語学研修費の負担が軽減した。これらの補助金に対する認知度が低い事からも、補助金等の情報提供を積極的に行う必要がある。加えて費用面も含めた研修の情報を早い段階から学生に情報提供などを行い、学生が金銭的な工面ができる期間を十分に確保する等の工夫が必要ではないかと考える。語学面の問題については、海外研修前に語学面を含めた学内研修が行われる。また、研修には教員が同行するため語学面での不安も少ないのではないかと考える。また、参加者からも、語学面での自信を得たという声が多数聞かれており、これらを含めた情報提供することで、学生の不安も軽減するのではないかと考える。

4. 今後の国際交流に関する課題

現在、国際交流プログラムとして、海外研修や語学留学、学内での留学生との交流会など国際交流セ

ンターを中心に実施している。外国派遣のプログラムの中には、学生の研修参加による学びを発表したり、報告書を作成したりするものもあるが、実際にこれらのプログラムの参加により、学生がどのような力を得て、その後の学習等へ影響しているのかなど、詳細に調査したことはない。これらを明らかにし、プログラムを評価することも今後の課題として必要ではないかと考える。

次に、学内で実施している留学生との交流会を見ると、留学生との交流に参加した経験がある人は1割にも満たず、学内で実施している国際交流プログラムが活性化しているとは言い難い。これらの交流は、留学生の経験や学びを視点に考えられているため、本学の学生がその参加により、どのような学びがあるかも含めて検討することも必要ではないかと考える。上述したように、異文化理解を深めていくためには継続的学習環境の整備が必要であり、学内での国際交流プログラムの充実も大きな課題ではないかと考える。

また、今回の調査から、学生は国際交流について多様なニーズを持っていることも明らかになった。その内容も、異文化理解を求めている人もいれば、英語圏での留学、専門分野での交流を求めている人もいた。また、学部の特徴から、学業に影響を及ぼしにくい短期研修や留学生との交流の場を増やしてほしいと求めている人も多かった。これらのことから、現在行っている国際交流プログラムに加え、学生のニーズに対応したプログラムも検討していくことも必要であると考えられる。

今回の調査では、大学全体の傾向としてとらえたが、今後は、学部や学年、性別の特徴も合わせて検討し、より細かな対応ができるような検討も必要である。

結 論

本学の国際交流プログラムを検討するための基礎資料を得るために、本学学生の国際交流に関する意識調査を実施した。海外研修や海外留学の認知度は高かったが、それらの支援制度についての認知度は低かった。また、本学学生は、国際交流によって、異文化理解や異文化交流を望んでおり、ニーズは多様化していることが分かった。今後は、海外研修や海外留学の拡充に加え、学内で実施している国際交流プログラムの活性化も図り、継続的学習環境の整

備を行う必要がある。

本研究は、平成28年度福岡県立大学研究奨励交付金（全学横断型プログラム）の助成により行ったものである。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省. 大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chyukyo4/036/siryo/attach/1338083.htm (2017年10月5日アクセス)
- 2) 小島奈々恵、内野悌司、磯部典子. 日本人大学生

の海外留学に関する意識調査—「内向き志向」と留学意志の関係—. 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集. 2014 ; 30. 21-26.

- 3) 渡部晃正. 留学の評価に関する一考察: 元留学生による自己評価の分析より. 桜花学園大学研究紀要. 2001 ; 3. 65-80.
- 4) 黄梅英、孟慶栄、森田明彦他. グローバル社会における国際理解力の育成に関する研究. 尚絅学院大学紀要. 2015 ; 69. 113-128.

受付 2017. 10. 2

採用 2018. 2. 16